



**國見 英治**  
KUNIMI Eiji  
芦森工業(株) 大阪工場  
パルテム・防災技術開発部

**土** 本学会が100周年を迎えたことは同時に、日本のインフラ設備の老朽化を示しているとも言える。幾度もの災害を経験し、少子化により働き手が減少する日本では、非開削技術による安全・安心・快適の提供が今後より一層求められるだろう。

第90号の特集は『小口径管路の非開削修繕・更生技術』であった。小口径は、前号特集の大口径とは異なり管内での人的作業が不可能である。だからこその工夫が各社に見られた。特に電

力管路の事例では、いくつものトラブルを乗り越えて施工を完了した過程が綴られ、強く印象に残った。他の技術も製品開発までの多大な苦労は想像に難くない。皆様のインフラ設備の維持管理を担う者としての責任感の強さを感じた。

昨年、下水道管更生工法のJIS A 7511が制定された。これをきっかけに品質確保に向けた取り組みが、改定を重ねながら、盛んに進められるだろう。そのとき製品開発で培われた改善・改良の経験が役立つに違いない。



**玉井 俊洋**  
TAMAI Toshihiro  
積水化学工業(株)  
ライフラインカンパニー  
バリューチェーン事業推進部

**管** 渠更生工法のJIS規格制定について  
日本列島の全長の2倍に匹敵する6,000km以上にも及ぶ実績に、約30年を数える管渠更生工法の歴史を感じるとともに、これまで以上のスピードで増加する老朽管路の規模、および都市生活に与える影響を考えると、管路更生に携わる事業者としての責任を強く考えさせられる記事であった。

その中で、今回JIS A 7511が制定され、従来のISO規格に加えて日本独自の耐震品質について

も包含した規格が誕生したことを契機に、多種多様な非開削更生工法全体の品質向上を期待したい。今後、都市への人口集中が予測される中、交通や生活への影響がより小さく、地震にも強く、当然ながらコストも安くといった要求がますます高まるとは思うが、より安定した品質での下水道渠の非開削更生が進歩し、都市生活の安心安全の増進が図られるよう、民間事業者としても努力を重ねていきたい。



**東海林 千春**  
TOUKAIRIN Chiharu  
日本ヒューム(株)  
技術部

**私** の通常業務は、技術部内に於いてのデスクワークが中心です。そのため、現場や工場を見学する機会は少なく、社内勉強会や購入雑誌・機関誌で情報を得ることが多くなります。

ましてや非開削の工事現場に足を運ぶ事はめったになく、写真で現場状況を把握し、写真で記せない部分を図から読み取り活用しています。

とは言っても百聞は一見にしかず。現場で実物を見られた時の実物の大きさや作業員の方たちの細やかな仕事にはとても感動してしまいます。

最近、ある新聞で紹介されていたスマホアプリを体験しました。それは、スマホのカメラを所定の場所に向けて、新聞記事の写真が動画で見ることが出来るというものでした。今後の機関誌についても、このようなデジタルツールを使っている技術や現場の情報が疑似体験出来るような紹介の仕方があると、より一層の理解が深まると思っています。